

3	〔俳諧短冊〕（手に於葉も）	近世	松井家旧蔵文書	P01013	No. 853-737
---	---------------	----	---------	--------	-------------

松井素輪の門人、曾水の短冊です。

「手に於葉も けふやききして 春の雨」

最初の「手に於葉」は「てにお（を）は」と「手」「葉」が掛けられ、「葉」には「言（こと）の葉」（ことば）の意味が込められていると思われます。後半は、今日春の雨を聞く（来る春を想う）といったことが表されているようです。

松井素輪（儀兵衛、1732～1792年）は、前橋町本町にあった本陣の当主でした。俳諧を好み、当時は“三日月素輪”として全国に知られていました。江戸時代中期の上州を代表する俳人の1人です。追善句集には高崎町の女性俳人・羽鳥一紅（1724～1795年）らも文章を寄せています（「追悼蓮の浮葉」No. 580ほか）

さて、この短冊の上部には「木菟庵の会始に／おりから雨の催（もよお）し／ありて春のけしき／もいとおも（思か）しければ」とあります。「木菟庵」は素輪の庵号です。本短冊は、素輪が年の最初に主宰した句会において書かれたことがわかります。

作者の曾水は、別の短冊（No. 853-730）や「素輪翁社中帖」（No. 745）によれば、前橋細ヶ沢町（現・前橋市住吉町）に住んでいた大野通安という男性です。後者の資料からは、安永5（1776）年3月に入門し、当初は「涼花」という俳号を用いていたことがわかります（複製本 PF1902でも閲覧可能、文書番号 47/745）

今回の松井家旧蔵文書の公開分には、短冊が961枚あり、そのうち同一作者としては、数種類の句を様々な書体で書いた登舟（柳下亭）の約65枚が突出しています。それに次いで多いのが曾水・涼花の25枚です。熱心な門人だったことがうかがえます。

